HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第２部　台湾の５０年　「今台湾とは何か」をどう考える？
Author(s)	若林, 正丈
Citation	北大法学論集, 51(4), 248-264
Issue Date	2000-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/15035
Type	bulletin (article)
File Information	51(4)_p248-264.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

基調報告

「今台湾とは何か」をどう考える？

若林正丈（東京大学大学院総合文化研究科教授）

はじめに

1　台湾研究の四系列

本稿では台湾のこの五〇年の歴史と現状、未来について簡単に考察したい。国分先生の報告では、中国を見るのは難しいということで研究視角についてドラマチックな議論をしているが、ここではまず簡単に現代台湾を見る学問上の視角について、如何なる分類が可能なのかという点について筆者なりの分類を述べ、筆者がその分類の中で何をしようと

しているのかという点について説明していきたいと思う。

現代台湾（戦後）に対する学問的な問題意識には四つの系列、川島報告流に言えばラインがある。一つは、発展論（開発論）ラインの問題意識である。これは台湾の産業化が開発途上国の中で非常にうまくいったということに関するものである。周知のとおり、「台湾の奇跡」という言葉があるほどで、それを本の題名にした研究者も八〇年代には出てきていた。これについては、経済学の新古典派の議論や社会学派の議論まで、大変賑やかな状況にあるが、比喩的に言えば「台湾の奇跡の政治経済学」というような定義の仕方もできる。

八〇年代後半になると民主化が本格化し、民主化論系列の問題意識が出てきた。当初問題になったのは、この民主化、比較政治学的な民主化、あるいは自由化のブレイクスルーが、如何なるタイミングで、また如何なる背景で始まったのか、また政治体制の移行は政治についてはどのように進行していくのかという方向であった。現在問題になっているのは、日本語にするのが難しいのだが、民主体制の定着あるいはdemocratic consolidationという方向に問題意識が出て来ている。台湾の当局者は、台湾の民主化を「静かな革命」だと言っており、この言葉を比喩的に借りれば「静かな革命」の政治社会学といった問題意識が依然続いていると言えるだろうと思う。

第三は、筆者がアイデンティティ系列の問題意識と呼んでいるものである。それは広く言えば文学研究も、歴史研究（台湾史研究）も含まれる。周知のとおり、歴史研究はナショナリズムのディスコースの形成に関わってしまう面があり、他方でエスニックなディスコースの形成にもやはり歴史学（歴史の発見）が材料になってしまう。こうした意味で歴史学もアイデンティティ系列の問題意識だと思われる。無論、文学や歴史だけではなく、直接アンケート調査をして自分は何人だと思うかというようなことを問うこと、台湾に住んでいる人々のエスニックなアイデンティティやナショナルアイデンティティを問うということも様々なかたちでおこなわれている。これらは、台湾ないし台湾人とは何かと

いう系列の歴史社会学であろうかと思われる。

第四は、中国大陸と台湾との特殊な関係、国際関係のようであり国際関係でない関係を如何に捉えるかという研究領域である。これは両岸関係の政治経済学と呼べるかと思う。地域研究に求められるアクチュアリティという点では、このラインはますます重要になっている。

以上のように、台湾が国際的に注目されていく物事の経緯に沿って学問・研究のほうが追随しているという側面が強いかと思うが、ひとつその系列の研究が終われば終わってしまうということではなくて、重なって段々台湾研究そのものが豊かになっていくと言えるし、台湾研究のセンターも動いていると思う。台湾の奇跡云々の話しが出て来た時は有力な台湾研究が台湾の外で行われていた時期であったが、民主化と共に、また政治的タブーが消えると共に、どの系列の研究も台湾で広くおこなわれるようになった。特に民主化系列、アイデンティティ系列、そして最近では統独問題（統一・独立）問題系列の問題意識のある研究が爆発的におこなわれている。国分先生によると中国でもそのうちそうなるということだろうが、台湾研究では、国外の研究者が現地の学者の研究をフォローするので精一杯という状況がもう早くから見られたと思われる。部分的にはその前からそうであったが、全体としてはこの五、六年からこのようになった。ただ台湾での研究状況の全体的な印象としては、様々なかたちで新しく深い議論が出てきているものの、台湾ではなかなかスタンダードな議論が定着しない。また、学問的に様々な議論を総合する役割をやる人がなかなかいないようでもあるという印象もあり、他方で研究の量的な発展、知的な発展、それから研究対象のセンターが元に戻った、あるいは本土化・現地化しているという状況であると思う。

2　筆者の研究履歴

筆者は、一九九二年に最初の台湾政治に関する研究書を出版した。その際には、「分裂国家と民主化」という副題を付けた。これは、基本的には民主化系列問題群の中の一つの作品であるが、その時点で台湾とは何かという問題が民主化と共に動くという事は明らかであった。その頃、台湾独立という主張が政治舞台に公然と登場し始めていた。それは、単に政治的な主張だけではなく、文化・思想の面でそれをサポートする主張が出始めて来ていたのであり、こうした状況をうけて、台湾ナショナリズムというものが既にあるのだということ、またアイデンティティ系列の問題があるということを指摘しておいたのである。

現在筆者がやろうとしているのは、台湾とは何かというアイデンティティ系列に軸足を置いて議論を組み立てることである。そうした台湾政治論を一回作るべく、この二、三年日本台湾学会の学会運営とは別に、個人として研究を進め機会がある度に話をしてきている。こうする中で他の分野の方にも理解頂けるかたちで自分の主張を組み立てたいと考えている。

さらに、今一度さきの問題意識系列の話しに引きつけると、台湾のアイデンティティの問題は、既に明らかに政治化し、また国際政治問題に直結する問題になっていると思う。従って、先ほどの見方で言えば、筆者の進めている研究はアイデンティティ問題に軸足を置きながら、それは広い意味の中国の政治的な統合問題の理解に役立つものでなければならないということになってくるだろうと思っている。こうした意味では、当初の論とスタンスは同じであり、一つに軸足を置きながら、もう一つの問題にも洞察を加えられるような台湾政治像を作っていきたいと考えている訳である。このようなところに筆者の研究の位置があるということをご承知おきいただきたい。

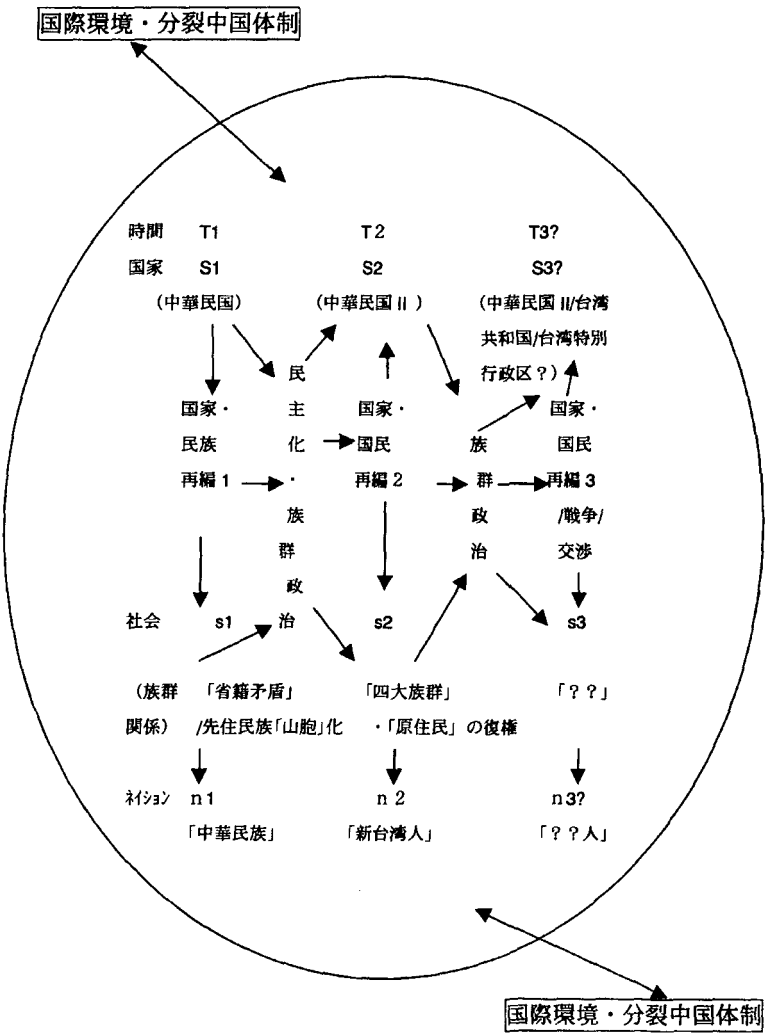
3　台湾をめぐるアイデンティティ・ポリティクス

ここでは民主化の内容を詳細に説明することはしないが、確認しておきたいのは、台湾では民主化ということだけでは表現できない政治的な変動が発生しつつあり、これからも変っていくという状況があって、その中で大きなものはやはりナショナルアイデンティティの変動であろうということである。それは世論調査の数字等を見ても明らかである。例えば「あなたは中国人ですか台湾人ですか」、あるいは「中国人でもあり台湾人でもある両方ですか」という、こういう聞き方のアンケートが一九九二年ぐらい（一番早いのは一九八九年）から始まるが、その結果は九三年を境にして大きく変っている。私は中国人だという回答が九〇年代初めに四〇％を超えたのだが、今では最低になっている。一番増えたのは両方だという回答である。二番目は自分が台湾人だというものである。そして中国大陸との関係が緊張したりすると、この両方という回答と台湾人という回答が逆転したりする（最近では、さきの集集地震の後に一時的に逆転している）。

転機となった一九九三年は、いわゆる台湾の万年国会に対する全面的な改選がおこなわれ、政府の正統性が大きく更新された次の年に当たり、それから軍人あがりの郝柏村という、野党から非常に嫌われていた首相が交代させられ、台湾籍であり今総統選挙に出ている連戦に変り、それから国民党の中央秘書長が本省人になるなど、政権人事の台湾化が一層進んだ年でもある。このように、民主化の進展とナショナル・アイデンティティの変容とは明らかに関連があるといえる。

この時期に変ったもう一つのことは、台湾にいる住民とはいったい誰か、というアイデンティティに関する支配的なディスコースである。そういった変化については図1「台湾をめぐるアイデンティティ・ポリティクス：概念図」を参照願いたい。ここでT1は民主化までの段階、戦後の台湾国家の旧体制、アンシャンレジームの時期を指している。この時期の国家はROC（中華民国）である。これは、後に旧体制が民主化してからセカンド・リパブリックが成立した

図0-1　台湾をめぐるアイデンティティ・ポリティックスのダイナミックス



出所：筆者作成

と解釈すると、ファースト・リパブリックということになる。この旧体制では、国民党版の中国ナショナリズムに沿った国家建設・国民建設政策が採用されていた。この時期には、自分が何であるのかということに関する国民の支配的ディスコースは、自らを中華民族、あるいは中国人だということであった。最近の台湾でこのような問題を分析する際には、漢字の言葉としてネイションのレベルを「国族」、エスニック・グループのレベルを「族群」という言葉を使うことが定着しつつあるのだが、このファースト・リパブリックの時期にそれに関わっていく文化的な集団（エスニック・グループ）については、後の「国族」「族群」というかたちではなく、皆中華民族だというディスコースの下での社会のエスニックな構成として表象されていたということを考慮しなければならない。そういう前提の下で民主化があり、ディスコースが変っていったのである。

こういった台湾のアイデンティティ・ポリティクスに関心のある政治学者にとって忘れられない光景が、九八年十二月にあった。それは九八年十二月に行われた台北市長選挙のキャンペーンの場面で、外省人の馬英九という候補の応援演説の場でなされた、「新台湾人問答」である。それまでは馬を積極的に支持していたとは言い難い李登輝国民党主席兼総統が応援に駆けつけて、「あなたは何人なんだ」と馬に聞くと、馬が「申し上げます。私は台湾の米を食べ台湾の水を飲んで育った、新台湾人です」（読売新聞訳）と答えた。これがこの時の選挙を象徴する場面であると言われている。この新台湾人という返答に対して、李登輝は「台湾に先に来ようが後に来ようがみな台湾人だ」と述べた。これにより外省人対本省人というエスニックな区別に対して、非常に包摂的な「新台湾人」という理念を打ち出した。

筆者はあまり他国の例を知らないが、選挙の候補が何人なのかということが選挙戦の最大の争点になる選挙はそうあることではなく、このことがまさに台湾政治がアイデンティティ・ポリティクスという特徴を有していることを示している。先の事例は一つの典型例だが、実はこの言説の戦いは台湾の中だけに留まらない。この翌年、中国の銭其琛副首

相が「新台湾人」を批判、「本籍が台湾省であろうと他の省であろうとみな中国人・中華民族だ。新台湾人という概念は海峡両岸の間に溝を作ろうとするものだ。我々は断固反対する」という声明を海峡の向こうで発表している。一方で李登輝総統は、その後国民大会などで「新台湾人と言う理念は我々が国際的に立っていく上で必要」という意味付けもしている。「新台湾人」という概念は明らかに内に向かっては包摂のためのロジックなのだが、外に向かっては排除のロジックなのである。

更に言えば、九九年夏には「特殊な国と国の関係」という李総統の言葉で大騒ぎになったが、これも台湾にある政治体というもののアイデンティティをどう考えるのかということと不可分である。すなわち、「新台湾人」と「国と国の関係」という議論はワンセットであると筆者は考えている。

なお、これはあまり注目されなかったが、九九年十一月の「Foreign Affairs」誌に李登輝自身が寄稿をしたということがあった。日本の新聞では「特殊な国と国」を再度主張したものと報道されているが、私が注目したのは論文の最初のパラグラフである。最初のパラグラフで述べられているのは、「台湾はフルデモクラシーを実現し、その後に新しいナショナル・アイデンティティの意識が出てきた。それは民主化によるのであり、民主化を経て投票箱の力で新しいナショナル・アイデンティティができていくのだ」ということである。ここでナショナル・アイデンティティを如何に定義するか、これについては歴史的にエスノ・ナショナリズム、シビック・ナショナリズムなど様々な議論があるが、この場合は文化に重きを置く定義というよりは、政治共同体としてのネイションという位置づけの上に新台湾人の概念があると意識されているようである。

台湾政治研究者の課題としては、民主化とこのような新しいナショナル・アイデンティティに対するディスコースや政策がどのように絡み合ってでてきたのかということを、先ず政治過程として論述しなければならないということがあ

る。この筆者自身もこれを自らの課題だと考えている。

台湾を如何に考えるかということは、つまりそれを如何に見て、その課題を如何に果たしていけばよいかということであり、筆者はそれを一所懸命に考えているところである。台湾のナショナル・アイデンティティの現状を前提として、私が今それに形容詞を付けるとすれば「変容はしたけれども躊躇している」、すなわち「変容し躊躇するナショナル・アイデンティティ」ということになると考えている。世論調査の結果等々を含め、このように形容するのが適当だと考えている。

一　ベースラインの確認：その一　～戦後台湾国家の三重の性格～

上記のような状況を前提として、二〇〇〇年三月の総統選挙はどうなるのだろうか、また今後の中台関係、両岸関係はどうなるのかということを述べれば、それは未来というカテゴリーに相応しいのだが、ここではそうしたことではなく、遡ってこれを歴史社会学に、あるいは政治社会学的に洞察して、これからどうしたらいいかという点について、これまで考えてきたことを述べておきたい。

考え方のストラテジーについて、ここではどこから変わったのかということ、そのベースラインは何なのかということの確認作業をまずおこない、その上で如何なるロジックに変わっていくのかということを述べるのが順当だと考えている。そのベースラインには二種類ある。第一は国家であり、戦後からある国家の性格というものを把握しなければならない。第二は、その後に来るナショナル・アイデンティティの変容に関して、社会のエスニックな構成が一つの前提になると考えている。ベースラインとして両者を大まかに把握すると、以下のようなことが言えると考えている。

まず国家について述べてみたい。台湾の戦後国家においては、基本的に四五年から四九年を一種の前史とし、四九年以降の国家つまり統治機構を三重の性格を持ったものと捉えるのが、その後の展開を考えると上でよいのではないかというのが最初の提案である。三重といっても、一つ一つをただ重ねてみたら三重だったということではない。それは、国際社会における台湾の位置、それから中国との関連における性格、台湾社会との関連における性格である。この三重構造を把握すれば、比較的総合的に台湾を見ることができるのではないかと思う。

第一の国際社会における性格、これはかなり韓国とパラレルに把握できるのだが、中国の内戦による分裂と東西冷戦というものが結合する事によって、分断され、比較的安定してしまった一つの政治的空間が台湾にできあがっているということである。その結果として、あるいは同じことの裏返しとして、アメリカの強い影響力の下に台湾が置かれ、支援されていたということがある。それは、政治・経済・軍事全てにわたっており、韓国もそうであるが、これは結果であるが経済発展に成功し、その余禄として民主化もあったのである。これは、必ずしも旧体制の特色にはならないかもしれないが、重要なことである。

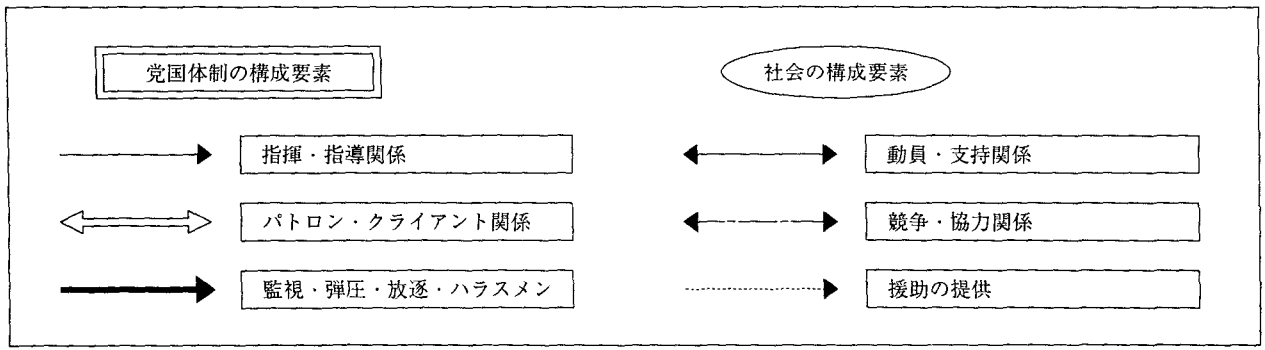
第二の中国との関係は、国際的な局面の中で、政治的境界が固定してしまったため、ある国際的な合意がなければこの局面が終結しない状況になっているということである。そういう枠組みの中に嵌っているということは、韓国ともあまり違わない。中国との関係においては、韓国とはここから違ってくるのだが、冷戦による分断が起ってそこから国ができたというのではなく、内戦による分裂が先行して、そこに冷戦が被さってきたということが問題となるのである。中国共産党と内戦をして敗北したのだが、それにも関わらず自分達は正当な中国の国家であるということが、国家のイデオロギー・機構に大きく強く反映しているということが言えるのである。これこそ、民主化系列の議論をする時に頻出する長期戒厳令、反乱鎮定動員時期臨時条項、万年国会など諸々の国家の組織を強く規定しているのである。また、

国民形成の政策もそこから導き出されていて、台湾人の中華民族化ということをマンダリン「国語」の普及を通じておこなうというというように言えると考えている。

第三の台湾社会との関係については、やや耳慣れない言葉だが、新しい概念を導入するのがよいと考えている。ワイツァー（R.Weitzer, *Transforming Settler States*, University of California Press, 1990）というジンバブエと英領北アイルランドの政治学的研究をしている政治学者がいるのだが、彼が settler state という概念を出している。文字だけ見ると植民国家といった訳になってしまうのだが、そう訳すとミスリーディングである。まず外からの移住者集団が土着集団に対して優越的地位を確保していること、しかもその集団が移住する国家というものは、移住者集団の出身地の国家からは少なくとも事実上は独立していること。こういうものを settler state と呼ぶというのがワイツァーの議論である。この settler state に対して台湾のある学者が「遷占者国家」という訳を付けた。これがまた見事な中国語で、移っていって占領した人がいる国家だというのだから、これでたとえば台湾政治においてやたらと言われていた外来政権という言葉の持つ政治的な価値判断が排除されるし、また台湾独立派の古い人タイプには戦前にいた日本と外省人を同じ位置において、植民地だという把握をする研究者がいたのだが、この「遷占者国家」という言葉を使えば、植民国家と違うということは明らかなので、そういう語弊を避けることができる。こうした意味で、これは見事な訳であると筆者は考えており、同じ漢字民族としてこれを拝借することにしている。

上述のアンシャンレジーム期の統治体制について、最近台湾で良い分析が出されている（図2参照）。龔宜君の『「外来政権」與本土社会』（台北・稲郷出版社、一九九八年）などがその代表であるが、この人の論点の新しいところは、戦後やって来た外省人と本省人というのは統治の方式・手法を変えているのであり、そもそも異なるという前提で見ていく、それぞれ政権に通用させる方式に違いが出てきており、それが明確にわかるということにある。それが台湾の旧

注１）矢印等の説明



注２）矢印①－⑦の説明

矢印①：地域的利権や腐敗・不正見逃しによる特権的利益と独自の地盤に拠る政治的支持の交換。党務系統の得票動員力によるコントロール。

矢印②：選挙民への個別的「世話」と選挙区への利益散布と投票との交換。選挙時地元集票ブローカーを通じた金銭・物品散布。

矢印③：国家による生活資源の優先配分、内戦経験共有によるエリートとの連帯感、一般社会からの隔離（外省人軍事・兵士など）などによる党組織への直接的吸収、党国への強い忠誠、即ち国民党の「鉄票部隊」。

矢印④：民衆服務ステーションを通じたサービスの提供と選挙における地方党部推薦候補への支持。

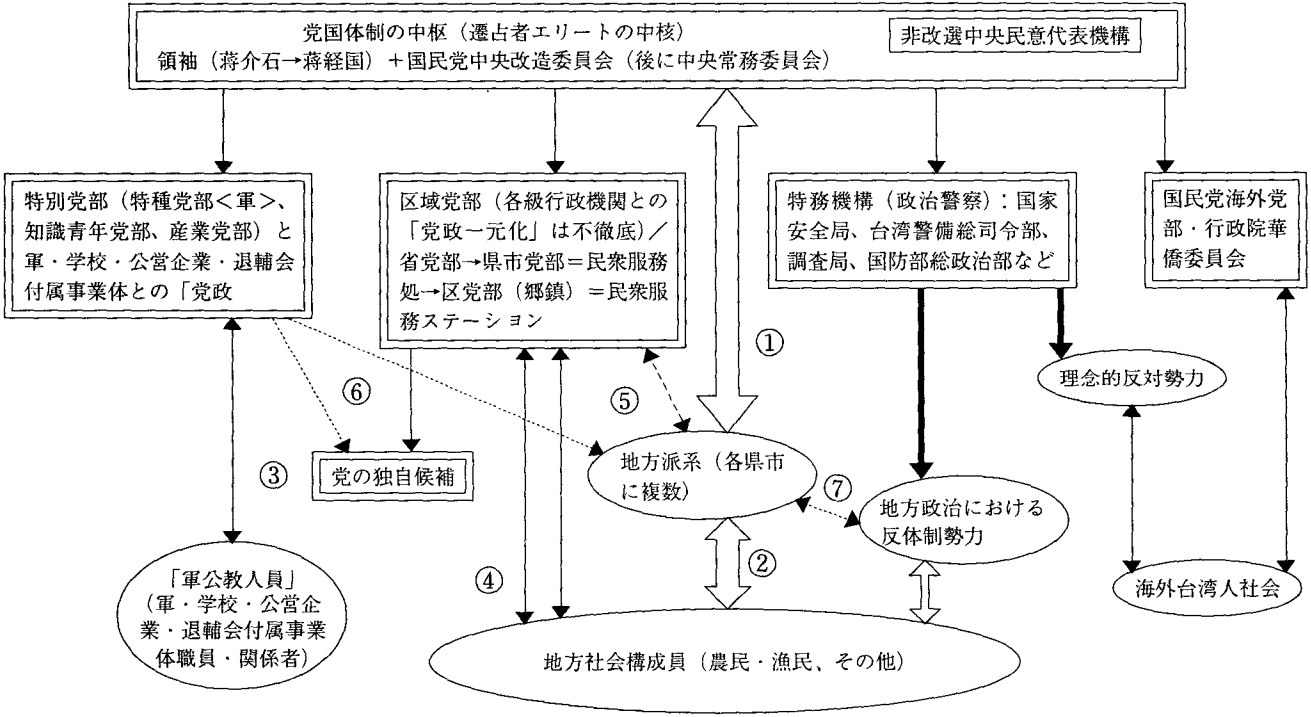
矢印⑤：地方派系が党の公認（ないし代替の利益）を得られれば協力、得られなければ党紀違反で立候補か地方の党外反対派を暗に支持。

矢印⑥：「鉄票」の機動的配分による地方派系コントロールないし牽制。国民党は④と合わせて選挙民の約３割の動員力を保有。

矢印⑦：地方派系が党の公認（ないし代替の利益）を得られれば対抗関係、得られなければ何らかの協力関係。

出所：龔宜君の研究を参考に筆者作成

図２　党国体制を通じた遷占者エリートによる統治構造



体制の組織的性格として挙げられる、いわゆる党国体制とか、疑似レーニン式パーティステイトというのである。後者のほうは中華民国史研究をしている人からの評判が悪いのだが、そういう組織的な性格と如何に絡んでいくかということを基本的にうまく説明しているのである。外省人については、いわゆる特殊党部というものを通じて、国家の機構、様々なセクターで、すなわち党国体制で直接面倒を見、そうして掌握する。本省人については、基本的には地方派閥をコントロールすることによって間接的に掌握する。これについては、彼の前にも相当詳しい研究がある。今はやや下火だが一時期地方派閥研究が台湾の政治研究の主流だった頃があり、その一環で筆者も翻訳書を出したりしている。図2では、このようなシステムによって遷占者国家の一つの内容が担保されているということを示している。

なお、台湾の事実上の独立を支えたのは「アメリカの平和（Pax Americana）」であり、その「アメリカの平和」が如何なるシステムであり、それが如何に変わっていったかということが台湾のアイデンティティ・ポリティクスに関わっていくこともとも重要である。その説明もしなければならないし、それがまた理論の道具立ての一つになるということである。

台湾における遷占者国家の特色ということについては、特に移住者集団の土着集団に対する優越的地位をを支えるためにはワイツァーの言っている internal security system（内部安全システム）が必要である。これは具体的には平時警察とか情報機関などの暴力装置であるが、そうした強いものがなければいけないし、台湾にもそれが確かに存在した。周知のとおり、五〇年代前半には白色テロルがあり、戒厳令が長い間敷かれていたということもその一端である。しかし、一方ではローデシアとは異なり、最初から民主化した訳ではないにしても地方選挙が実施されている。実は普通選挙権を台湾住民に付与したのは国民党政権だということは忘れてはならない。地方選挙などは、五〇年代の最初からあったのである。また政治エリートに台湾人を入れていくことも、七〇年代からは意識的にはっきりとおこなわれていた。党

のレベルでは、蔣介石がもっと早く始めようとしていたという研究も若い研究者から出されているほどで、相対的に見ると割と近代的であったと言えよう。そうでなければ、民主化に伴ういわゆる台湾化がより激烈な政治過程を伴った可能性がある。

そしてこのような移住者集団優位体制が自生的な平和的民主化によって終焉を迎えていく。こうなることで遷占者国家という性格が終焉していくのだが、それは平和的な民主化・漸進的な民主化で達成されたということが言える。確かに、本当に達成されたか否かについては疑問があり、それが二〇〇〇年の総統選挙で出てくる可能性もある。だが、少なくとも政治家の演説などの表面からは、遷占者国家であることは止めたというように読み取れる。だが、ここで最初の優越者集団の母国に対する事実上の独立はまだ維持されているという状況にあるということもも一つのポイントとして押さえておかなければならない。国家については、このあたりがベースラインである。

二　ベースラインの確認：その二　～多重族群社会～

次にエスノ・ポリティクスとナショナル・アイデンティティのポリティクスが展開する過程を考えて見たい。ここでは、台湾社会が重層的なエスニックな構成を持った社会であるということを確認したい。そのナショナル・ディスコースの転換と共に台湾の社会のエスニックな構成についての言説も変わってきた。それまでは、外省人対本省人の「省籍矛盾」としてこのエスニックな構成を捉えていたのであるが、台湾ナショナリズムがある程度体制に吸収されていく過程で、「四大族群」という言い方が出てきた。先住民族（台湾では原住民と呼ばれている）、外省人、客家それから福建省南部から祖先が来ている閩南人（俗に言う台湾語というのは閩南人の母語を指して言う）という四つのグループから

成っている。四大族群といっても大きいのは閩南人だけで、先住民族は人口の一・五％ぐらい、外省人は十三～十四％、客家も同じぐらいで、残りはすべて閩南系の人たちですから、ほんとは一大三小あるいは一大二中一小である。「四大」というのは、事実の反映ではなくてイデオロギーかもしれない。このような並列は、実は事実を無視している訳である。原住民について様々な議論があって、九族か十族あるという議論があるし、昔平埔族だとされて既に漢民族になってしまったと思われる人々が、新たに民族（あるいは族群、エスニック）アイデンティティが欲しいと言い始めているということもある。こうした意味で流動性は高いのだけれども、原住民に対して一番重要な境界は漢族に対してなのであり、彼等から見れば外省人も本省人も同じなのだ。しかし、本省人の中にも客家と閩南人というのがあり、閩南人もアイデンティティ・ポリティクスの展開に連れて変ってきている。具体例は後で塚本氏がコメントで述べると思われるが、従来文化的な面でした問題にされなかった客家が、最近、政治的にも族群に成りつつあるという局面が出てきている。性格の異なる、したがってそこに境界が形成され、その時期も異なる重層的なエスニックな構成を持った社会が台湾だいう事が議論の出発点になるのではないかというのが筆者の考えである。それを示したのが表一である。

おわりに

上記のような二つのベースラインを与えた上で、ではエスノ・ポリティクスとナショナル・アイデンティティのポリティクスをどう考えていくのかということについて簡単な整理をするための羅針盤として準備したのが冒頭で触れた図1である。これでどこまで説明できるかについては、材料をもう一度集めて整理してみないと分からないが、T1からT2への時間は既に過ぎている。また、T2における国家とエスニックグループの把握がこれで良いとすれば、その間

に民主化というものがあり、他方で新しい国家建設と国民建設の政策が発動して、社会とのインターアクションの中でネイションやエスニック・リレーションについての新しいディスコースが形成されていく。教育も少しずつ変わり、あるいは国家のシンボルである、例えばお札や通貨の模様・図案なども変り始めている。一方、選挙の投票行動などにも複雑な影響が現れている。

今後、中国と統一したらどう安定するのかしないのか、また両岸関係が平和的に推移するのか戦争になるのか、その戦争は併合の戦争になるのか独立戦争になるのかというようなことが介在してT3の状況が現れるということである。こうしたことを考えながら、先に述べたアイデンティティ系列の議論・台湾政治論を構成していきたい。